

平成27年度 第66回卒業証書授与式 式辞

春のやわらかな日差しに、角力灘の青が一段と美しく輝いています。

三年間の思い出を慈しむかのように、なごり雪が舞っています。

今日この佳き日に、西海市副長竹口幸（たけぐちかずゆき）様をはじめ、多数のご来賓の皆様、並びに保護者の皆様のご臨席を仰ぎ、ここに、長崎県立西彼杵高等学校、第66回卒業証書授与式を、かくも盛大に挙行できますことは、誠に光栄であり、卒業生並びに職員一同喜びに堪えません。心から御礼を申し上げます。

ただいま、ここに卒業を認められた、五十一名の一人ひとりに、卒業証書を授与いたしました。卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます！心から、君たちの門出を祝福します。

保護者の皆様におかれましては、この度のお子様のご卒業、誠にありがとうございます。まだ中学生のあどけなさを残し、不安と希望を胸に、本校の校門をくぐってから早三年がたちました。これほどに遅しく成長されたお子様の姿をご覧になり、感慨も一入のことと拝察いたします。この三年間は、保護者の皆様に取りましても、お子様への期待と心配の絶えない日々だったことと拝察いたします。いつも暖かく見守り、励まして来られた甲斐あって、今日ここに、立派に高等学校普通科の課程を修了し、いままさに社会に旅立とうとしているお子様の姿は、何より凛々しく、立派に輝いていることでしょう。心より、お祝いを申し上げます。

さて卒業生の皆さん、この西彼杵高校に入学してからの三年間を思い起こすと、実に多くの様々な思い出が甦ってくることでしょう。一年生の頃の、不安や焦り、二年生の頃のみんなと共同することの難しさや充実感、三年生になってからの進路へ向けた努力と達成感。その苦しみや喜びのどれもが、君たちを大きく成長させてきました。

その一つの象徴が、今年の体育祭にも見事に表現されていたと思います。3年生のリーダーシップのもと、1年生から3年生までが、本当に一つになった、素晴らしい演技や応援合戦が繰り広げられました。最後の閉会式で、どのブロックのリーダーたちの目にも、涙が浮かんでいたのが印象的でした。それは、この体育祭に、本気で、全力で取り組んだ証だったのだと思います。多数の人間が一つになることは決して容易なことではありません。しかし、その目の前の困難を全員力で乗り越え、ブロックが一つになるために全力を出し切った。そしてそれが見事に達成された。何もしなければ何もないところから、君たちは見事な“感動”を作りました。人と人がつながることで生まれる確かな“感動”と“達成感”は、これからの社会を生きていく上で、君たちにとって最も大切な財産となるはずです。なぜならば、社会を生きるとは、人と人との間を生きるということだからです。他者への思い、周囲の人々への思いをきちんと持つことができることが、大人の証明だからです。

閉会式の最後に、3年生の男子が全員で、私を胴上げしてくれました。それはおそらく、君たちの、この母校、西彼杵高校への愛着の表象であったのだと理解しています。あの日は、どこも大雨で、この西彼杵高校の真上だけが晴天でした。それはあたかも、君たちのこれまでの、学業、懸命な学校生活、みんながつながるために努力を重ねたそのことへの、天からの祝福のスポットライトのようにも、私は思ったものです。目の前の困難に全力で立ち向かい、そして見事にそれを乗り越えていく経験。その場面が、この三年間、様々に見られました。その度に君たちは、少しずつ確かに成長してきたのでした。

今年の、本校のテーマは、「新濤」でした。創立70年の歴史の上に立って、さらに「新たに、大きくうねる波」を本校に創りだそう！この西彼杵高校が、さらに新しく進化し、長崎県の中でも、最も優れた立派な教育の場、確かな「学び」を通して、明日を生きる「希望」へとつながる学び舎を創りだそうと、皆が共に学ぶ「学びの共同体」を、県下のどこよりも先んじて、生徒の皆と先生方が一緒になって頑張ってきました。その思いもまた、文化祭のフィナーレでの、全員が肩を組んで歌う校歌に、象徴されていたように思います。

今ここに卒業していく66回生の諸君は、この70年という歴史に、「新濤」の確かな1ページを刻んだと言えるでしょう。どうかこの西彼杵高校の卒業生であることに、自信と誇りを持って、胸を張って卒業してってください。今君たちが手にしている卒業証書には、それだけの歴史の重みと価値があるのです。

さて、皆さんがこれから進むべき、現代の日本社会は、大きな曲がり角を迎えています。戦後70年を経て、世界の有り様は大きく変化してきています。世界の混乱が、そのまま日本社会の価値の混迷につながっている。

国家同士の、民族間の紛争やテロは、終わることなく世界規模に広がってきています。また国際化という名のグローバル経済は、確実に私たちの日常に影を落としていきます。少子高齢化の問題や経済格差の問題。さらには東日本大震災の悲劇の収拾。近隣諸国とのあるべき交流のあり方等々、多くの難題を突きつけられています。

そしてこれからの日本という国のあり方に対して、あるいは地域という共同体の今後のあり方について、まさに18歳を越えた君たちは、主権者として主体的に関わっていかなくてはならないのです。君たちの日常とこの日本という国と、この地方のあり方とは決して無縁ではない。日常生活の幸福と社会のあり方とは、ますます直接的につながってくることでしょう。これからは、君たち一人一人が主権者として、客体ではなく主体として、社会を支えていく覚悟が問われることとなります。

これまで、自分が自分のためだけに「やりたい」こと、「やらなければならない」ことを求めていればよかった。しかしこれから大切なことは、自分が他者の期待に対して「できる」こと、周囲の人々や隣人の求めに応じて「応える」ことの「できること」が大切になります。それが大人になるということです。社会の役に立つこと、社会に参画していくとはそのようなことなのです。その時にこそ、君は、他者から必要とされる、なくてはならない存在となっていくのです。自分が他者に対して「できること」に、誠実に、全力で立ち向かっていくこと。そのために学び続けること。それが幸福な人生に近づく鍵でもあると私は思います。

卒業にあたり、次の詩を贈ります。大木実という人の「前へ」という詩です。

前へ

少年の日に読んだ「家なき子」の物語の結びは、こういう言葉で終わっている。

——— 前へ

僕はこの言葉が好きだ。

物語が終わっても、僕らの人生は終わらない。

僕らの人生には終わりが無い。

希望を失わず、つねに前へ進んでいく、物語の中の少年ルミよ。

僕はあの健気なルミが好きだ。

辛いこと、厭なこと、哀しいことに、出会うたび、僕は弱い自分を励ます。

——— 前へ

この詩人は、決して有名になったのでも、お金持ちになったのでもない。貧困と病気療養に向き合いながら、ただ平凡な日常を、誠実に生きた一市民に過ぎません。しかし、だからこそ、彼の言葉には、何の飾りも見栄もない。淡々とした、平明なことばで、人生を歩むことの「真実」が謳われているように思うのです。

辛いこと、厭なこと、哀しいことに、出会うたび、僕は弱い自分を励ます。

——— 前へ

人生は、いつも順風満帆な時ばかりではないでしょう。予想外の苦境に立たされる時もあります。自分の決定に苦悩することもあるでしょう。人為を超えた災害や苦難に立たされることもあるかもしれない。しかしその時なのです。その苦境の時にこそ、誠実に、「前へ」進んでほしいと願います。決して「後ろ」向きではなく、「前へ」向かって歩いてほしい。そしてその時の道標は、「希望を失わない」ということ。どんな苦境にあっても、「希望」を失わず、「前へ」向かって歩き続ける限り、「明けない夜はないのだ」と私は信じます。

実は、人生の途中に「希望」があるのではない。「希望」があるからこそ、君だけの、かけがえのない「人生」が在るのです。どんな暗闇の中でも、「希望の灯」をかざして「前へ」進む限り、必ず「朝」はやって来るのだと信じて、「前へ」向かって歩き続けて欲しい。ゆっくりでもいい。愚直でもいい。「希望」という灯火をかざしながら、誠実に、「前へ」向かって歩いてもらいたいと思います。そのために、これからも、学び続けなければならないのです。「生きる」ということに対して、これからもずっと質問の手を上げ続けてくれることを願います。

どの教室の窓からも、海が見える学校。それが君たちの母校です。三年間、毎日見続けた、この角力灘の「海」を、決して忘れないでください。君たちの青春の「喜び」や「哀しみ」を、そして「希望」を、毎日映し続けた、この教室の窓から見える「海」を、心の中にいつまでも持ち続けて欲しいと願ってやみません。

歩くことに疲れたら、「海」を見なさい。生きることに悩んだら、心の中の、「海」に問いかけなさい。「海」を見るということは、立ち止まって、自分を見つめるということです。自分自身に向き合い、問いかけるということです。「今の自分は、これでいいのか」と・・・。「海」を想うということは、自分を認めるということです。「自分は自分でいいのだ」と・・・。

自分で自分を問うことのできる「心の海」を胸に刻んだこと。それがこの西彼杵高校でしか学べなかった、最も素晴らしい「価値」なのです。

この「角力灘の海」を、いつまでも心に抱きながら、この母校で過ごした青春を「誇り」に、「前へ」向かって、歩き続けて欲しいと願っています。

行く手に幸多かれと祈ります！

第六十六回卒業生諸君、「前へ」！！

平成二十八年三月一日

長崎県立西彼杵高等学校

校長 福田鉄雄